4-4

「多様性・持続可能性と考古学」をふりかえる

吉田　泰幸

セミナーシリーズ第 4 回のテーマ、羽生淳子氏の発表タイトル、そしてアートルから常日頃聞かされているアメリカ西海岸バークレーという気風で筆者が思い出したのは、**アリス・ウォータース**氏である。何かの拍子に見た NHK 制作の番組、「**アリスのおいしい革命**」が印象に残っていたのである。ウォータース氏はアメリカのスローフード運動の母とも称されている女性で、活動のキーワードとしてはスローフードの他に、オーガニック食材の重視、Urban Farming の推奨、学校給食の改善や食農教育、地産地消の促進といった、現代日本でも重視されているものが多い。

羽生氏は発表の中でも、グローバル企業の寡占状態を招きかねない遺伝子組み換え作物を含む食品市場への疑義を明確に示しており、それはアリス・ウォータースに代表されるバークレーの気風を体現するようでもあった。同時に、氏自身の社会問題に対する意識は、家庭環境の影響もあったことが本人の口から語られた。羽生氏が自分の生い立ちも含めて語ったことは意外であった。欧米の研究者は一般的に、「客観性や形式を重んじ、自分のことを表に出すことはよしとしない学究文化」（アンダーソン . 加藤訳 . 2009:1）であることをアートルからも聞いていたからで、北米での生活が長い羽生氏もそれに倣って、自身のバックグラウンドはあまり話さないのでは、と予想していたからである。しかし、それも含めて語ったことは、羽生氏にとって現在遂行中の「**小規模経済プロジェクト**」は緊急性が高いものであることを示している。

北米からみた日本考古学

羽生氏は自身の研究分野は「プロセス系」の考古学だったと発言している。今回の発表でも序盤の、ルイス・ビンフォードの民族モデルに沿って縄文時代の遺跡群という狩猟採集民の活動痕跡をみるという研究スタイルがそれに相当する。そのプロセス系の論文は日本語でもいくつか発表されている（羽生 1990、1994、2000a・b、2002 など）。集落遺跡を静的な村落共同体と結びつける傾向の強い日本考古学においては、羽生氏のような狩猟採集民の季節的移動を含む動態の痕跡として遺跡群が形成されるという捉え方で行われる研究は少

ない。その意味で、帰納的（inductive）な方法が全盛の日本考古学において、北米式の演繹的（deductive）アプローチによって、縄文遺跡の理解について多様性をもたらそうとしたとも言える。

羽生氏の主著である“Ancient Jomon of Japan”（2004）の Chapter 1: Introduction では、「戦後の日本考古学の歴史は開発と裏表」である状況を統計データなどで示しており、英語圏に日本考古学を伝える研究者でもある。その方向性の一環として羽生氏は、クレア・フォーセット（Clare Fawcett）氏との共著による日本考古学批評と言える論考をいくつか世に出している（Habu and Fawcett 1999、2008）。これは氏の発言の中にもあるが、カナダ・マッギール大学のブルース・トリッガー、井川史子両氏の影響が大きい。考古学的実践自体を reflexive にみる試みと整理できるだろう。羽生・フォーセット両氏の日本考古学批評には、De-politicization、「脱政治化」という表現がみられる（例えば Habu and Fawcett 2008: 95–96）。主に行政主体の日本考古学に対する批判的論評の一つで、以下のような理解を基盤にしていると筆者は考えている。1945 年以前、考古学は皇国史観への貢献など、政治に取り込まれるしかなかったが、戦後の文化財保護運動や学生運動などの左派イデオロギーによる「政治の季節」の後、**埋蔵文化財行政のシステムが整備され**、そのシステムの中で多数の論考が生み出される。しかしそれらは土器編年研究を基盤とした文化史的研究、あるいはその延長上にある日本人論、日本文化論に集中し、フェミニズムや先住民考古学、考古学の倫理などの政治的課題をもとりこむことで変化を続ける世界の考古学の動向からは取り残されていった。その原因を解析する概念として「脱政治化」をあげている。

筆者はこのネーミングが妥当かどうか、検討が必要と考えている。埋蔵文化財行政のシステムの確立の経緯や、その後の運用それ自体にも政治性はあるだろうし、国民共有の財産として文化財が定義されたからこそ、英語圏で批判的

アリス・ウォータース　Alice Waters
フランス・ソルボンヌ大学への留学時にパリの食文化に感銘を受けて、1971 年にバークレーにレストラン“Chez: Panisse”（シェ・パニース）を立ち上げた。食を通じて世界を変えることを目指す運動家。

「アリスのおいしい革命」　現在でも頻繁に再放送されている。書籍化もされている（ウォータース・NHK エンタープライズ取材班 2013）。

「小規模経済プロジェクト」　正式名称は「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性：歴史生態学からのアプローチ」。セミナーでの発表以降、このプロジェクトに関係する論文がいくつか刊行されている（羽生 2015・2016、Crema et al. 2016）。

埋蔵文化財行政のシステムが整備され　各自治体への埋蔵文化財専門職員の配置、埋蔵文化財センターの設立は 1975 年以降に活発となった（日本考古学協会 50 周年記念出版特別委員会 1998）。

に捉えられることが多いとはいえ、考古学による日本人論、日本文化論への貢献もなされるからである。つまり、日本考古学は研究の言説・Discourse が文化財行政の政治性・Politics に一致していくという形で、戦後は別の政治に取り込まれた一面がある。おそらく「脱政治化」と言った時の「政治」は狭義の、上記したフェミニズムや先住民考古学、考古学の倫理の再検討に代表されるアカデミアや社会の変革を唱えるリベラルな政治性ではないだろうか。そのように考えると、「脱政治化」という語を日本考古学に対する批判的論評に用いていることは、羽生氏が紹介したプロジェクトの背景を知る上でも重要である。

接続の試み

羽生氏にとって、小規模経済プロジェクトは、これまで結びつかなかったものを結びつけようとする、大きく三つの試みの集合体であると言えるだろう。一つは、羽生氏が「ポストプロセスが出てきた時には、掛け声倒れなところも」あったが、今は「プロセスかポストプロセスかの二者択一でなくてもよい」というブルース・トリッガーの発言を紹介しているように、論理実証主義的、科学的であることを志向するプロセス考古学と、そうした西洋近代の知への枠組みへの疑義や、現実政治へのコミットも含むポスト・プロセス考古学の志向を結びつけようとする試みである。二つ目は帰納的（inductive）アプローチで「真面目な人ほどデータの収集に留まり」、「大きなデータで小さなことを言う」とも称される日本考古学に、演繹的（deductive）アプローチを、これまでの民族誌モデルの応用とは違った形で持ち込んでいる。具体的には縄文中期の人口減少は多様性の喪失の結果なのではないかという作業仮説を検証することで、三内丸山遺跡のような大規模遺跡の発掘データや青森県内の広域な考古データをもとにした「大きなデータ」で「大きなことを言う」考古学を創出する試みである。三つ目は英語圏のようにリベラルな政治性と結びつかない状態の日本考古学が日々生み出す大量のデータと、意識的にか、あるいは無意識的に、自らの反グローバリゼーションにも連なる政治性を接続させ、社会科学の流れの中で考古学を考え直すことを日本考古学に促す試みである。

対話の途中、中村大氏とデータの読み方についての議論が続く箇所がある。これも上記のような接続を試みる上では、避けられない。大規模な事前発掘調査で得られた三内丸山遺跡や青森県内の縄文時代遺跡の多量のデータに支えられ、帰納的（inductive）に積み上げられたいくつもの可能性は、羽生氏の仮説を支持するのかどうか、そのようなやりとりだったと捉えられる。

また、対話の終盤で典型的な Male Chauvinist（男性優位主義者）と言える男性とのやりとりが始まった。その男性は年配で、発言は支離滅裂な部分が多く、男女の差異を本質主義的に捉えていることがうかがえた。この男性は見た目が

印象的だったため筆者の記憶に残っていて、2017 年 1 月 29 日の東京・有楽町で行われた「北海道・北東北の縄文遺跡群世界遺産登録推進国際フォーラム」にも参加しているのを目にした。この男性が熱心な考古学ファンであることも確かである。こうした人々にも考古学が支えられているのならば、最終的にはあのような男性の側にも変容が起こるようなものを考古学が提示する必要もある。セミナーシリーズ第 4 回を東京で開催するにあたっては、金沢大学東京事務所の協力により、他の回よりも幅広く広報をしていただいた。あの男性の参加、発言、それとの応答も広報の成果の一つでもあり、そのことで第 4 回の対話は、2014 年の日本考古学の光景を切り取る Ethnography として、その価値を高めたと思う。

ユートピアとしての縄文、過去の教訓・失敗学としての縄文

羽生氏による小規模経済プロジェクトの主要なフィールドは青森県、特に三内丸山遺跡である。セミナーシリーズ第 2 回の「ふりかえる」文章の冒頭で述べたとおり、三内丸山遺跡が国史跡に指定された 1990 年代中盤の三内丸山ブーム、あるいは縄文ブームの中で、数々の書籍が刊行された。そこでの言説を羽生氏はフォーセット氏とともに分析して批判的に検討し、総じて、日本人論、日本文化論が引き続き強調されることと、縄文文明論に代表される縄文文化の過度な再評価の出現とに注意を促している（Habu and Fawcett 1999、2008）。両氏が批判的に捉えるこの流れは、何度か言及した Arts of Jomon を企画した人々の言う「Happy で Free」な縄文、ユートピアとしての縄文という考えを支えているのではないかと考える。セミナーシリーズ第 6 回では吉田が左派イデオロギーをも支える縄文理解として、中沢新一と坂本龍一の『縄文聖地巡礼』（坂本・中沢 2010）を取り上げているが、そこでの縄文理解は、矛盾に満ちた現代社会につながる悪い流れが始まったのは弥生時代で、それ以前の縄文に目を向けようとの考えも垣間見える。これもユートピアとしての縄文の亜種と捉えることができる。羽生氏の政治性も坂本龍一氏と共通するところが多々あるものの、小規模経済プロジェクトがそれとは一線を画する点は、多様性によって長期間継続した縄文から成功を学ぶだけでなく、多様性の喪失によって失敗した縄文から過去の教訓を学ぼうとする点、失敗学としての縄文を打ち出そうとしている点にあるのではないか。

今回羽生氏が紹介した自身の研究プロジェクトは、研究をとおして如何に政治的な問題に関わるのかを模索、提示するものである。そして、それは羽生氏の家庭やバークレーの環境において養われた問題意識に裏打ちされたものでもあり、これまで結びつかなかったものを結びつけようとする試みでもある。

社会科学としての考古学

羽生氏は何度も社会科学の重要性について発言し、「社会科学の文脈で考古学をもう一度考え直すことができるかどうかが問われている」ことを課題としてあげている。考古学が社会科学と言われると、ピンと来ない人が多いかもしれない。筆者もその一人である。考古学は人文科学、または人文学とされることが多いからだが、ではそれらと社会科学の差異は何かと問われると、実はそれもおぼつかない。そのような状態で筆者はこの「ふりかえる」文章中で、小規模経済プロジェクトと羽生氏の政治性、家庭環境とバークレーという土地柄との関係など、氏にしてみれば余計なお世話なことを書いているが、それはこうした誰もが様々な出来事に対して何らかの価値判断をしていることと、社会科学として考古学を考え直すとはどういうことかを考えたいからでもある。

羽生氏の呼びかけどおりに、拙いながらも社会科学の古典を例に出したい。マックス・ウェーバーは社会科学の論文においては、執筆者の価値基準を明確にすべきで、それが「客観性」につながるとしている（ウェーバー . 富永・立野訳 . 折原補訳 1998）。これは、執筆者がよって立つ価値が明確であれば、それを読んだ人々が批判を展開する場合に、執筆者の価値基準、立論の際に参照している考え方の枠組み、事実認識やデータのハンドリング、それぞれに対して同意できるかどうかを表明し、建設的な批判や議論を行うことが可能になるという風に筆者は理解している。アートルはセミナーシリーズ第 5 回の対話の中で、「客観性の考古学もさることながら、主観性の考古学をもっとやりましょう、という気がしないでもない」と発言している。主観性の考古学というと、疑似科学に基づく解釈も許容するかのように聞こえてしまうが、この背景には、「その『主観』がどういうものか分かる場合、周りの人はその人の発言が『客観』的に見えている」という理解がある。ただしその場合にも、「『なんでもあり』の相対主義に陥らない」土台を、我々はコミュニケーションの中で探すしかない。社会科学としての考古学が、日本考古学であるのか、ないのかを問う必要性を、羽生氏の発表をとおして強く感じた次第である。

岡村勝行氏は、少なくとも考古学の社会学としての側面を有するパブリック・アーケオロジーという分野が立ち上がってくる背景として、「『解明』される過去」から「『考察』される過去」へのシフトがあるとした（124 頁 : Fig. 3.2.3）。それと同時に、「過去を考察している」主体自体を批判的に問う視点も立ち上がってくる。それはさらに、「過去から現在を考える」ことにも連なることを、松本直子氏の発表は伝えている。

ジェンダー考古学とフェミニスト考古学

松本氏が冒頭述べているように、氏も縄文時代研究者である。**認知考古学**

（Cognitive Archaeology）というポスト・ポスト・プロセス考古学とでもいうべき、プロセス考古学とポスト・プロセス考古学の相互作用で生まれた視点から日本列島の考古資料の分析を進めている（松本 2000・2004、川畑・松本 2007）。羽生氏の打ち出した食の多様性と持続可能性の重視に引き続き、考古学自体の多様性と持続可能性に関係する論点として、ジェンダーの視点の導入を説く展開となった。

セミナーシリーズ第 4 回の直前の読書会では、松本氏も言及したジェンダー考古学の古典的論文 “Archaeology and the Study of Gender”（Conkey and Spector 1984）を課題論文とした。コンキー（Conkey）氏もカリフォリニア大学バークレー校の研究者である。筆者が印象的だったのは、狩猟採集民 “hunter-gatherer” を “gatherer-hunter” (同 : 6) としていたことである。この論文は冒頭のイントロダクションの後、“Feminist critique of archaeology” という節から始まり、人類学や考古学における男性中心主義の批判的検討が展開される。その際に男性が主に行なっていたと考えられることが多い狩猟（Hunting）と、女性が主体と考えられることが多い採集（Gathering）を逆転させるあたりに、男性中心主義批判の徹底ぶりが見てとれたのである。“Archaeology: The Key Concept”（Renfrew and Bahn eds. 2005）というキーワード集の中でも、Gender archaeology と Feminist Archaeology は相互に関連づけて紹介される。Feminist Archaeology の**項目**では、フェミニスト考古学は 1970 ～ 80 年代の女性運動の中で発達してきたものとされる。一般に北米フェミニズムは第 1 波（First Wave）の女性の参政権を求める運動の後、第 2 波（Second Wave）の雇用機会の均等を求める運動に展開したと言われているが、ジェンダー考古学の出発も、第 2 波の時期の所産と言える。

松本氏は考古学の専門家以外の参加者の方が多いと想定していたらしく、ジェンダー考古学の入門編とでもいうべき内容でプレゼンテーションを構成したと述べ、ジェンダー概念の基本的な解説の後、話題は男性・女性の賃金格差など、女性の社会的地位に移行していく。そして、日本のある時期に構築された「男は仕事、女は家庭」のジェンダー観への批判が繰り返され、そこに味の

認知考古学（Cognitive Archaeology）　ポスト・プロセス考古学では文化の意味や象徴作用も重視されたが、一方ではそれは羽生氏も言うように「掛け声倒れ」であったり、行き過ぎた相対主義を誘発する可能性もあった。意味や象徴といった認知的要因の重要性を認めつつも、客観性と科学性を維持するためにコリン・レンフルー（Colin Renfrew）が議論を主導し形成された側面がある。認知考古学が扱う認知に関わるテーマは、過去の人々の認知だけでなく、考古学者自身の認知も含まれる。

Feminist Archaeology の項目　Renfrew and Bahn eds. 2005: 116–121
執筆者は Marie Louise Stig Sørensen。

素の企業 CM に象徴されるような、考古学が主として扱っている原始・古代にまでそのジェンダー観が投影されていることを指摘し、考古学もジェンダー教育と無関係でない点が強調される。そしていくつかの具体例をあげて主に日本列島先史時代の考古学的資料にジェンダーの観点を導入する事例を示し、後半には博物館展示にみる男女の役割の描かれ方への批判へと展開していった。この点で、期せずしてセミナーシリーズ第 2 回で扱った復元画の問題と接点を持つことになり、安芸氏との展示の方法をめぐる対話に発展することになった。

筆者が改めて感じたのは、筆者自身も松本氏の言うように特定のジェンダー観の影響が強い復元画等に特に疑問を持たずにいたことである。“hunter-gatherer” を “gatherer-hunter” と逆転させる論文に触れることや、松本氏のジェンダー考古学入門編を聞くことがなければ、男性である筆者に考古学におけるジェンダーに疑問を持つ契機は訪れなかったかもしれない。先のキーワード集の項目は Feminism Archaeology ではなく Feminist Archaeology、強いて訳せばフェミニズム運動家の考古学となっている。上記したようにジェンダー考古学の古典とされる論文（Conkey and Spector 1984）が男性中心主義の批判から出発するため、筆者には Feminist Archaeology と Gender Archaeology との差異がわかりづらかったのだが、キーワード集の中では、Feminist Archaeology は考古学的知識がどのように構成されるのかにも着目し、その構成プロセスに関与する多くを男性が占めることによるジェンダーバイアスを問うことも視野に入れているとされる。松本氏によるその論点、つまりは日本考古学におけるジェンダーバランスへの直接的な言及はなかった。松本氏が発表の序盤にデータで一般的な男女格差やジェンダー観の問題を提示したように、**日本考古学における性差についてもデータに基づく若干の検討事例がある**（菱田 2014、中西 2014）。ここでは、筆者の近年の経験の範囲で集計しうるデータを示そうと思う。

2015 年 5 月の**日本考古学協会総会**の延べ発表者数に占める女性の延べ発表者の割合は約 17%、2015 年 12 月の TAG (Theoretical Archaeology Group) 2015 Bradford の女性の割合は約 42% であった。**二つの会は性格が異なる**が、日英で

日本考古学における性差についてもデータに基づく若干の検討事例がある　これらでは考古学関連科目担当教員や考古学協会員や考古学研究会員、それらの理事や委員の構成などが検討対象になっている。中西 2014 では若干だが英国との比較がある。

日本考古学協会総会　毎年 5 月に関東の大学で開催される。協会員による総会のほか、研究発表、ポスターセッションが開催される。

二つの会は性格が異なる　日本考古学協会は近年になって学生会員制度が創設されたが、それまでの入会要件は 25 歳以上、論文あるいは主となって編集した発掘調査報告書があることという、敷居の高い会でもあった。必然的に大学院生の研究発表も少ない。反対に TAG の発表者は大学院生も多い。この差異も二つの会の発表者数における女性比率に影響を与えていると考えられる。

多数の考古学者が集う会であることは共通している。ウェブサイト上で公開されている研究発表プログラムにみられる発表者（ポスター発表を含む）から集計し、**多少数字が上下する可能性はある**が、母数は前者が 235、後者が 191 なので一定のサンプル数があり、大まかな傾向を示しているとしてよいだろう。この差、つまり多様性の差は、研究の課題設定から解釈などの考古学的知識の形成プロセスにどのように影響を与えているのか、その詳細は今後の検討課題としても、松本氏が発表の中で問題視したいくつかの事例は女性が少ないことの具体的な結果を示している。そして、この差は近い将来の女性研究者の割合にも直結することは予想される。ジェンダー考古学あるいはフェミニスト考古学に取り組むのはほとんど女性であること、そして 17% という数字を目にする時、松本氏がジェンダーについてごく初歩的な話から始めたのは、ジェンダーについてはほとんど知られていないため、初歩的な話から始めざるを得なかったとも言える。

Questioning Culture

筆者が 2015 年 10 月末から 1 年間、英国・ノリッチにあるセインズベリー日本藝術研究所の日本考古学フェローとして滞在していた間、筆者のデスクは Archaeology Room にあり、何人かの英国人考古学者と机を並べていた。そのうちのひとり、シニア・フェローのサム・ニクソン（Sam Nixon）氏と各国の考古学に話題が及んだとき、彼は英国の考古学は Questioning、質問・疑問を発することを重視する教育が基盤にある、との見解を述べた。一方で、彼が初めてアカデミックなレポートの書き方を学んだのは、UCL（University College of London）在学中に溝口孝司氏のレクチャーを受けた時のことだった、とも述べ、英国の教育が無条件に他国に比べて優れているわけでもないことも付け加えた。また、ニクソン氏はアメリカの学生は教授に質問をぶつけることも少

多少数字が上下する可能性はある　日本考古学協会 2015 年度総会、TAG 2015 Bradford ともに、ひとつのペーパーに複数発表者があった場合、一人の研究者が複数のペーパーで発表者として名前を連ねている場合も全てカウントして延べ発表者数としている。日本考古学協会での発表者は日本人が大多数、TAG は西洋人が大多数だが、それぞれファーストネームである程度性別の判別は可能である。性別判断の間違いなどのミスも若干はあると考えられるが、大まかな傾向を比較するための数字としては有効であろう。ちなみに、2015 年度の日本文化人類学会の女性の延べ発表者の割合は約 46% であった（母数 169、集計方法は同様、元となる発表要旨集は田村うらら氏に提供いただいた）。同学会の発表者も大学院生が多い。筆者は日本考古学協会に参加経験はあるが研究発表を行ったことはない。初めての大きな学会での研究発表は IPPA (Indo-Pacific Prehistory Association) であった。その後、SEAA (Society for East Asian Archaeology) や SAA (Society for American Archaeology) に参加、研究発表をしているが、それらの学会で、集計はしていないものの女性が少ないと感じたことはない。

なく、従順すぎるとの印象も述べていた。一口に英語圏と言っても、英米で気風も異なるのかもしれない。

羽生・松本両氏とも、日本考古学において Questioning が少ないことを危惧しているように見える。学生の博物館展示の受け止め方や、ジェンダー観に関する課題に対する学生の反応などの発言にそれは現れている。羽生氏が言うように「行政の若い方達には、とても真面目」、「日本の考古学者はアメリカの考古学者やイギリスの考古学者と比べて、引けをとっているとは思いません」にもかかわらず、何かが足りないとすると、それは氏の言うように西洋近代社会で生まれ、変化を続けている社会科学の潮流に関する知識ももちろんそのひとつだが、Questioning Culture も大きいのではないだろうか。それがなければ、今の自分たちの枠組みを問うこともなく、考古学自体の多様性や持続可能性に思いが及ぶこともないからである。ニクソン氏は Questioning Culture の象徴で、英国の若い考古学研究者の登竜門のひとつが TAG (Theoretical Archaeology Group) であるとした。溝口氏がポスト・WAC の構想とした日本版 TAG が可能かどうかも、Questioning Culture の醸成にかかっている。それには、自らの政治性や価値判断、ジェンダーにも大きく関係してくる多様性と持続可能性という今回のセミナーのキーワードは格好のテーマであったと思う。

次のセミナーシリーズ第 5 回では、日本考古学の特徴のひとつとして英語圏でも紹介されることの多い埋蔵文化財保護体制への Questioning がテーマである。筆者が参加した TAG では、「考古学において若者はどこにいるのか」を問うセッションもあったが、第 5 回ではそうした話題も語られることになった。